

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401、044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo/>

第87号

新しくホームページが開通いたしました。どうぞご利用ください。なお旧ホームページのアドレスも残っていますのでご注意ください。

“検証” 江戸時代までの日本人の歩き方(1)

====もしかしたら手と足は左右同時に出ていたのでは?====

何百年も前と現在では、生活や行動様式が異なっているのは当たり前前のことです。現代人はパソコンを使い、情報を取得し、新幹線に乗って短時間で遠隔地に移動できるなど、生活のレベルや考え方も昔とは随分と異なっているという事は誰でも分かっていることです。しかし、歩き方や走り方という体の動かし方までもが現在と違っていたということはあるのでしょうか。

最近、江戸時代の絵画を見ていて、ふと気付いたことがあります。それは「大名行列絵巻」(写真1)でした。写真で紹介している絵は、馬上の侍が1名、その周りに数人の侍の姿が見られます。

一般的には私たちは歩行したり走ったりする場合、右足が前に出る時、右手は後ろに振られます。絵巻の中に登場する少なくとも

4名の侍は明らかに手と足が同一方向に向いています。

現在でも児童・生徒が運動会や体育祭の入場行進の際に緊張のあまり手足同方向で歩行することがあります。この絵の場面は、侍たちが緊張のあまりの歩行だったのでしょうか。あるいは絵師の描き間違えだったのでしょうか。もしかしたらあの歩行の姿が日本人の古来の歩き方であったのではないかという疑問も湧いてきました。

そこで、他の絵画などの資料で人々の歩行や走行の姿を確認してみる事にしました。一部紹介してみましよう。ただし、手に何かを持っていたりすると歩行の姿が変わってくるので、できるだけ両手に何も持っていない、純然たる歩行・走行の状態の手足同一方向で描かれている資料を時代別に探してみることにしました。

平安時代の、動物を擬人化した絵画で有名な「鳥獣戯画」を見ますと(写真2)にはウサギの動作が、(写真3)には猿の歩行の様子が描かれています。また「信貴山縁起絵巻」剣鎧護法童子の絵(写真4)は、右手に剣を持った童子の走る姿が見られます。

鎌倉時代は「一遍上人絵伝」(写真5)や「春日権現記」などに、安土桃山時代では「洛中洛外図屏風」が、江戸時代に入りますと大名行列の様子を描いた「東海道神奈川横浜風景」(写真6)や幕末期の錦絵「武州横浜八景之内野毛乃晴風」(写真7)の馬に乗った異人の横を走る日本人の姿が見えます。これらの絵を見ますと何れも歩行・走行ともに手足同方向で動いていることが分かります。

一方、日本最古に近い写真も確認してみました。江戸時代末に欧米人によって出版された「ファーイースト誌」掲載の当時の日本の風俗を撮影した写真を調べてみると残念ながら歩行・走行の特徴を示す写真は発見されませんでした。これはカメラ自体の性能の問題で動きのある被写体の撮影は当時ではまだ難しく、その多くが人物の静止画像か風景画像でした。明治時代初期の写真も同様で仕方のないことだと思えます。

また、明治中・後期以降の歩行・走行の写った写真や動画(NHK「映像の世紀」平成7・8年)を見ますと手・足同方向の姿を発見することはできませんでした。

このように色々調べてみた結果、少なくとも絵画をみる限り、江戸時代以前には、歩行走行の手足同方向の可能性ができました。次回は、平安時代以降中世の資料からも発見されたという事は、日本人の行動様式という視点で何か意味を持っているのではないかということ。日本人の歩行・走行方法の変化が起きたのはどのような理由によるものか等を考えてみたいと思います。(文:板倉)

写真1



写真2



写真3



写真4



写真7



写真5



写真6



シリーズ

「麻生の歴史を探る」第57話

麻生の寺院(7) 常念寺・阿弥陀堂(金井)

小島 一也 (遺稿)

栗木の常念寺はこの地方には少ない浄土真宗(親鸞開宗)の寺で、新編武蔵風土記稿には「一向宗、京都西本願寺の末、稲荷山と号す、開山はその人を伝えず、客殿六間に六間半南に向かう、本尊阿弥陀立像にして長一尺ばかり」とのみ記し、開山、開基、その沿革については触れておりませんが、寺の縁起、村の地誌には古い由緒が記されています。

地誌などによると、この寺は永禄元年(1558)、西本願寺の僧福寿によって開山、創立されたとしており、一方、この常念寺について町田市史は、金井村の阿弥陀堂の欄に、「入谷戸にあり、浄土真宗麻生栗木常念寺末、本山の栗木常念寺は元この地にあつたと伝えし」と記し、「宗祖親鸞、門徒浄念を伴い、この地に錫杖をとどめり」と述べています。新編武蔵風土記稿もこの阿弥陀堂については、「金井谷にあり、わずかなる堂なり、弥陀の木造長五寸ばかり、百姓持」と、その存在を記しています。

従ってこの寺の由緒は古く、金井の阿弥陀堂、親鸞・常念の伝承を真実のものとする、親鸞は康元十三年(1262)、90歳の高齢で寂しておりますので、その縁起は鎌倉時代に遡ることになります。浄土真宗といえど当時、門徒宗、一向一揆と熱烈な檀徒で知られ、僧福寿の出身は分かりませんが、永禄元年は、この地方では小田原北条氏の戦国の時代、新しい宗教間にも競合があり、鎌倉街道沿いのこの地に、本尊阿弥陀如来を移したもので、地元栗木の伝承には「昔、栗木村のお大尽が金井の阿弥陀様を栗木に持ってきた・・・」がありますので、そのお大尽がだれかは分かりませんが、当時、栗木村には浄土真宗の信徒が在ったことは確かなようです。

また、この寺の名は「常念寺」ですが、新編武蔵風土記稿には「浄念寺」と記され、文化五年(1808)奉納された境内の手水盤には、「上念寺」と刻まれており、金井の阿弥陀堂には親鸞が僧浄念を伴った故事から「浄念寺」であったと思われ、山号の「稲荷山」は創建以前に、本堂左手と現墓地の小高い丘に二社の稲荷社が在ったことから名付けられたとされています。

この寺の本堂は明和年間(1764~71)に再建されたと言われるもので、江戸時代の浄土真宗寺院の建築様式を残す貴重なものと言われ、それは内陣須弥壇上に阿弥陀木物立像を祀り、後方奥には脇壇があり、右に親鸞上人画像、左には蓮師御影(蓮如)を祀るもので、間取りは内陣、余間、外陣の3室からなり、内陣と外陣の間には中陣という矢来(棚の仕切り)が置かれ、市内では、加瀬の長弘寺、二子の光明寺、登戸の長念寺、麻生の常念寺にのみのこるものだそうです(市社寺調査報告)。

この寺は「いぼ取り地蔵」と近郷近在に知られていました。現在も参道右手に6体の地蔵様が並ぶ地蔵堂があり、造立年度を調べると、元禄十年(1697)が1体、宝永三年(1706)1体、享保二年(1717)1体、享保二十年(1735)が1体。他2体は読み取れませんが、江戸中期のもので、顔から頭をなでると「イボが取れる」と信仰され、右から3番目のお地蔵さんは、お顔がすっかりすり減っています。なおこの寺には、創立年は不明ですが、新編武蔵風土記稿が「和合院、除地、三步程、村の南によりてあり、当山修験なり」とする所があり、これは地元では「ホーエン様」と呼ぶ、常念寺の僧の「修験庵」だったと言われ、現在その跡地は片平・栗木境にあり、「和合院塚」と称され、樹木に覆われています。



常念寺本堂



いぼとり地蔵

時代は変わりますが、明治七年(1874)明治新政府は、大・小区制(戸籍区)を施行、この常念寺は栗木村他6ヶ村の戸長役場となりますが、当時この寺の運営、維持をしていたのは、栗木村の26軒、そして金井村24軒の信徒だったそうです(栗木 明日へ語り継ぐ)。

一方阿弥陀如来が栗木に行った、金井の阿弥陀堂は、3間×2間、6坪ほどの小祠で、木造五寸ほどの阿弥陀像を本尊に、村人より毎年4月10日、念仏講が催されてきましたが、昭和47年火災で焼失(町田市史)。今その跡(入谷戸)を訪ねると、雑草の生い茂る小屋に幾つかの仏像が安置され、寛永九年壬申(1532)法印秀長建立と読み取れる石塔2基が侘びしく残されています。

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「栗木 明日へ語り継ぐ」「麻生の神社と寺院」「歩け歩こう麻生の里」「町田市史」



町田市金井(入谷戸)の阿弥陀堂跡

シリーズ

時間と時計の話 第1部

和時計と西洋時計 (2)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆不定時法と定時法◆

ところで、時を計るといっても、自然の時間の中での暮らしでは、季節によって昼の時間と夜の時間の長さが違ってきます。人類が時を計りだした当初は、どこでも自然の時間を制度化していました。「不定時法」と呼ばれた方法です。そこでは日の出から日没までが「昼の時間」、日没から翌朝の日の出までが「夜の時間」とされ、夫々が6等分なり、12等分されて計られるのです。それゆえこの方法では、夏と冬では1時間の長さが昼も夜も、かなりの程度違ってきます。それどころか、昼の1時間と夜の1時間も、季節によって長さが違ってきます。

この不定時法による時間の計り方は、機械時計が誕生することによって、変わってきます。機械時計は昼夜に関係なく、一定のリズムで時を刻むからです。この機械の告げる時を制度化した方法は、「定時法」と呼ばれました。そのため機械時計が誕生し、普及し始めると、時の観念も次第に変化してゆきます。とりわけそうした変化は、機械時計が最初に普及したヨーロッパで顕著でした。機械時計を使用し始めた人々は、次第に不定時法から定時法へと、時の観念を移していったのです。

当然のことながら、最初に昼夜を問わない一定の時間を求めたのは、宗教者たちでした。祈りの時間を何より大切にす彼らは、祈りの時間が一定であることが、とりわけ重要であると考えたのです。1時間という時間の長さが、季節によって変動し、その都度祈りの時間が伸び縮みしたのでは、神に捧げる祈りの一部を伸ばしたり縮めたりしなければならず、それでは自分たちも困るし、何より神に対して失礼ではないか、彼らはこう考えたのです。機械時計の誕生は、彼らの悩みを解消してくれたのです。こうして機械時計は、ヨーロッパのカトリック世界で、まずは、宗教者の養成機関であり、かつ研究機関でもある修道院から広まっていきました。

機械時計ほど、正確に祈りの時間を知らせてくれる時計はありません。次なる望みは、ついでに時を告げる機能を付加出来ないかということでした。ずっと時計を見続けなくても、時計が時を告げてくれるなら、その間の時間を有効に使えるからです。こうして、1時間ごとに時を告げる機能が付いた時計が誕生することになったのです。時報を告げる機能の付いた時計の誕生はいつなのか？ この難問は現在でも特定できないのですが、およそ13世紀末～14世紀の初め頃であろうと、考えられています。掛け時計や置き時計は、英語ではCLOCKと呼びます。そして、CLOCKの原義は鐘です。鐘の機能つまり時報の機能を持った時計というわけなのです。

◆教会の時間と商人の時間◆

機械時計はこうして生まれました。それは宗教者の願いから生まれたものですが、機械時計が刻む時間は、自然の時間ではありません。こうして機械時計の誕生によって、自然の時間は人工の時間に替わって行きます。しかし、こうした変化が始まった時期とほぼ前後する形で、神の時間を管理し、時を告げる仕事と権利を独占していた宗教界に、対抗する勢力が登場してきたのです。

それが、西欧世界における新興の大商人たちでした。彼らは遠隔地貿易に従事します。そのため、彼らには、キャラバンが帰りつくまでのツナギの資金が必要でした。簡単に往復することが出来ないキャラバンには、手持ち資金のありつたけをつぎ込むことが、当然だと考えられていた時代でしたから、出立したキャラバンが帰りつくまでの年月を、留守部隊は、つなぎ資金の融資を受けて、凌ぐしかなかったのです。ここに金貸し＝金融業者が登場するのです。それゆえ、遠隔地商人が活躍すればするほど、当然金融業も発達することになります。前回も記しましたが、金銭の貸借には利子がつきものです。借りた金を使うことで利を得るのですから、利益の一部を謝礼として支払うのは当然とする考えが、そこにはありました。しかし、教会はこの考え方を認めませんでした。「金を借りている時間が利子を生むとは何事か。」これが教会の主張でした。教会にとっては、時間は神のものでしたから、これは譲れない一線でした。金を貸すことで利子を得る行為は、「神の物である時間を盗む行為」であり、「利子は神の時間を盗んだ結果、産み出される物」とされたのです。ローマ教会は、利子禁止法まで制定して取り締まりに熱を入れたのです。今でも、大手金融資本の多くはユダヤ系財閥の傘下にあります。初期の金融業のほとんどもまた、キリスト教の教えに縛られないユダヤ人たちによって、支えられていたのです。

しかし、遠隔地商人たちもしたたかでした。彼らは黙って教会の指示に従ったわけではなく、教会の規制を乗り越える方法を模索し続け、遂には自分たちの時間の論理を見つけ出したのです。「時間が利子を産むのではなく、時間こそは、お金そのものなのだ」と。Time is moneyとは、ベンジャミン・フランクリンの名言の一つですが、教会の論理を突き崩そうとした商人たちが、あれこれ考えた末に導き出した、商人流の考え方だったのです。(続)



フレスシアの天文時計



ルドン大聖堂の天文時計

歴史見学バスツアー第3弾 「武田家ゆかりの寺社巡り」新規募集！！

見学先：午前＝放光寺(甲斐源氏安田義定の創建)、恵林寺(庭園、宝物館も拝観)
午後＝武田神社(躑躅ヶ崎館跡)、甲斐善光寺、東光寺(甲府五山の一つ)等
昼食は甲州完熟屋本店にて

開催日：2015年9月17日(木)

集 合：午前7時30分 新百合丘駅北口 エスカレーター下

出 発：午前7時45分 解 散：午後6時50分頃(新百合ヶ丘駅→柿生駅)

募 集：49名(先着順、定員になり次第締め切り)

費 用：7,400円

申込み：8月21日までに往復葉書に必要事項(郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号、参加者全員の氏名・年齢)を記入の上、柿生郷土史料館宛(住所は1面トップ参照)にお送りください。

問合先：担当 小林基男 (電話 080-5513-5154、044-989-0622)

史料館古文書の会第3弾

古文書を通じて郷土の歴史に親しもう

募集

過去2回の古文書講読会は熱心な参加者の方々に支えられて、盛況のうちに終わることができました。今回新たに「古文書を読んで郷土史に親しもう」を合言葉にした輪講会を開催することといたしましたので、奮ってご参加ください(全10回)。

開催日：9月10日、10月1・15日、11月5・19日、12月3・17日、1月21日、2月4・18日

時 間：午前10時～12時 会 場：柿生郷土史料館特別展示室

指 導：飛田三枝子氏(柿生郷土史料館専門委員) 参加費：資料代として1,000円(初日徴収)

教 材：志村家文書を中心とした旧柿生村に伝わる古文書(グループ分けによる輪講形式で進めます)

募 集：20名(応募多数の場合は抽選により決定)

申 込：往復はがきに住所・氏名・連絡先を明記のうえ、「古文書申し込み」と記して当史料館までお送りください。締め切りは8月20日(当日消印有効)です。

問合先：担当 小林基男 (電話 080-5513-5154、044-989-0622)

柿生郷土史料館 8・9 月催物ご案内 (入場無料)

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日 (原則として月4回)

8月 1・8・22・29日(毎土曜日)

9月 6・13・20・27日(毎日曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時 (8月15日は休館です)

第8回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展(2)

◆◆明治・大正・昭和の歩みと人々の生活◆◆

会場：柿生郷土史料館特別展示室

(第2期) ◎明治の政治と対外関係 期間：5月24日(日)～8月29日(土)

第9回 実物の歴史
ミ二歴史資料展

王禅寺村「志村家文書」展示公開(1)

◆◆天保の飢饉に関する文書をみる◆◆

期日：4月18日～9月20日

内容：王禅寺村「志村家文書」をもとに江戸時代後期の社会の姿と王禅寺村の様子について考えてみます。



第56回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ(7)

入門 鶴見川流域史(中世編その2)

●鶴見川流域史を古代・中世・近世で考える その第4弾! 中世編しめくり!

講師 中西望介氏 (戦国史研究会会員)

日時 平成27年9月20日(日)午後1時30分～

内容 中世後期における鶴見川流域諸勢力は戦国動乱の時代をどのように乗り切ったのか